

ICT 機器別に見る利用が高いシニアの特性分析

ー ICT 利用のライフスタイル研究ー

○水野 一成¹ 飽戸 弘²

¹NTTドコモ モバイル社会研究所 ²東京大学名誉教授

1. 研究背景及び研究目的

NTTドコモ モバイル社会研究所が 2023 年 1 月に調査した結果では、60 代はスマートフォン（以下、スマホ）の所有が 92.1%[1]、パソコンの所有（家族の所有も含める）が 56.8%であった。また 70 代のスマホ所有は 76.2%、パソコンの所有（家族の所有も含める）は 36.5%である。スマホもしくはパソコンのどちらかを所有している 60 代は 94.5%、70 代でも 80.7%と多くのシニア層（本研究では 60 代、70 代を対象）が ICT 機器を所有している。シニア層がインターネットの利用頻度が高いと、社会的活動が促進される[2]。更にシニアがインターネットをコミュニケーションで利用することで、健康度自己評価や幸福度が高いことを縦断研究より明らかになっている[3]。さらに福定らは非対面交流中心であっても、主観的健康に寄与することを示唆している[4]。また、スマホやタブレットを利活用することで、情報に関することを中心に購買行動やペーパーレスに関して生活の変化が生じている[5]。このようにシニア層がインターネットを利活用することで得られる効果については、QOL や社会的活動の分野で多く実証され、利活用が活発な層が明らかにされているが、ICT 機器の多寡に着目した研究結果は多くない。本稿では、シニア層が利用している ICT 機器の中で、所有者が多い[6]スマホとパソコンに注目し、活発に利用している人の特性を明らかにすることを目的とした。

2. 調査概要

調査時期：2023 年 1 月 調査対象：全国、60～79 歳男女 調査方法：訪問留置調査

標本抽出法：QUOTA SAMPLING 性別(5 歳刻み)・年齢・エリアで割付 1,350 サンプル回収

3. 分析手法

1.スマホ高利用者の特性分析 分析方法：数量化理論第Ⅱ類

2.パソコン高利用者の特性分析 分析方法：数量化理論第Ⅱ類

3.1 と 2 の結果を合わせて見て、考察を行う

4. 分析結果

1. スマホ高利用者の特性分析結果（分析方法：数量化理論第Ⅱ類）

スマホの利用時間の結果より、①高利用層(26%)②低利用層(50%)③未利用層(24%)と分け、これを目的変数とする。なお、高低の閾値は 1 時間とした。説明変数はライフスタイル・就業に関連する変数と属性、計 12 の設問とした（表 1）。

分析モデルの精度は、判別的中率 64.1%、1 軸相関比 η^2 0.22、2 軸相関比 η^2 0.04、1 軸寄与率 84.7%、2 軸寄与率 15.3%である。2 軸は相関比がかなり低く、寄与率も低いことから、本稿では 1 軸を説明する。

表 1:説明変数の概要

大別	変数
ライフ スタイル	① イノベータ得点[7] ②即時遅延[7] ③外出頻度 ④移動手段 ⑤時間的ゆとり ⑥経済的ゆとり
就業関連	⑦仕事でパソコンを利用し始めた年代 ⑧現在の仕事
属性	⑨性別 ⑩年代 ⑪都市規模 ⑫居住地域

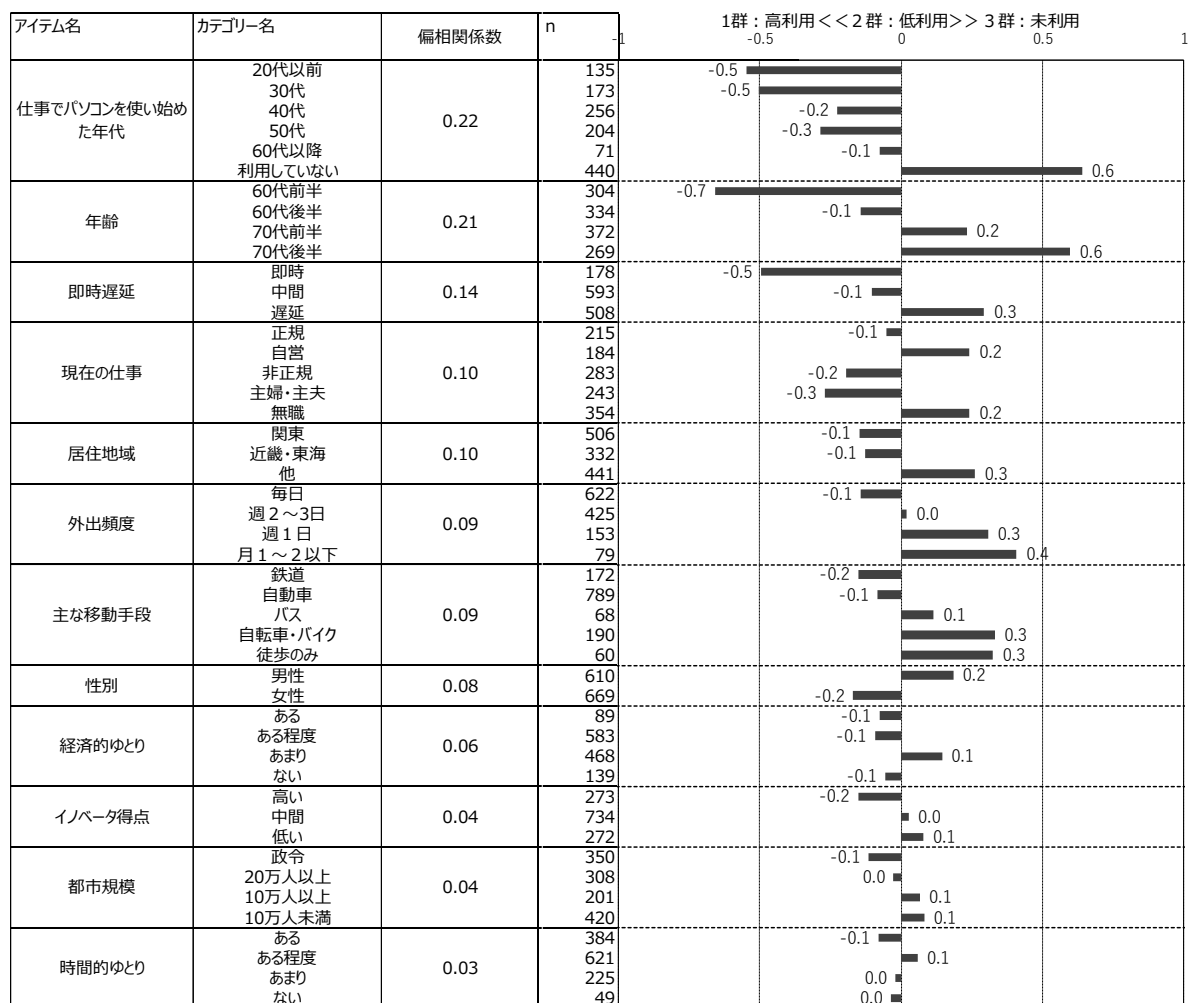


図 1 スマホ利用 カテゴリースコア及び偏相関係数

次に判別グラフ及び各群の平均値から 1 軸の解釈を考える。各群のカテゴリースコアの平均値は、1 群「高利用」-0.54、2 群「低利用」-0.08、3 群「未利用」0.76 となり、判別グラフからも、カテゴリースコアが負の方向に「高利用」、正の方向に「未利用」に分かれていることから、「高利用」と「未利用」を分ける軸と解釈した。

偏相関係数及び、カテゴリースコアの結果から、スマホの利用が高いシニアの特性を明らかにしていく。図 1 は偏相関係数が高い順に説明変数を並び替え、カテゴリースコアを表示している。最も高い偏相関係数の変数は「仕事でパソコンを使い始めた年代」であり、早い時期からパソコンを仕事で利用していた人が、スマホの利用が高い傾向であった。次に偏相関係数が高い変

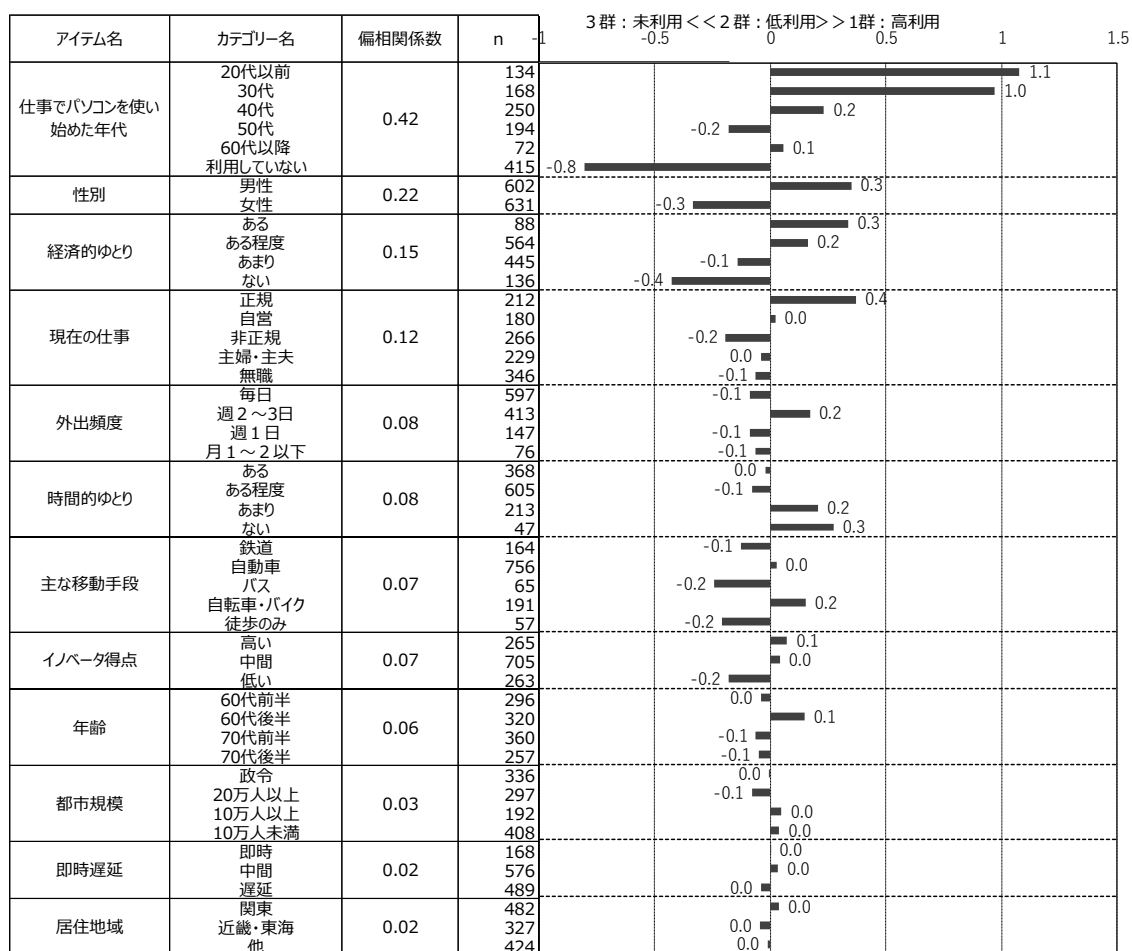


図2 パソコン利用 カテゴリースコア及び偏相関係数

数は「年齢」であり、シニアの中で年齢が低い人がスマホの利用が高い。その次が「即時遅延」であり、「即時傾向」であった。即時傾向とは、物事を判断する時に素早く判断する人が該当する。

2. パソコン高利用者の特性分析結果（分析方法：数量化理論第Ⅱ類）

パソコンの利用時間の結果より、①高利用層(16%)②低利用層(21%)③未利用層(63%)と分け、これを目的変数とする。なお、高低の閾値は1時間とした。説明変数はライフスタイル・就業関連に関連する変数と属性、計12（スマホ高利用層の分析と同じ）の設問とした（表1）。

分析モデルの精度は、判別率的中率75.8%、1軸相関比 η^2 0.33、2軸相関比 η^2 0.04、1軸寄与率90.2%、2軸寄与率9.8%である。2軸は相関比がかなり低く、寄与率も低いことから、本稿では1軸を説明する。

次に判別グラフ及び各群の平均値から1軸の解釈を考える。各群のカテゴリースコアの平均値は、1群「高利用」0.93、2群「低利用」0.60、3群「未利用」-0.44となり、判別グラフからも、カテゴリースコアが正の方向に「高利用」、負の方向に「未利用」に分かれていることから、「高利用」と「未利用」を分ける軸と解釈した。

偏相関係数及び、カテゴリースコアについて、確認していく。図2は偏相関係数が高い順に説明変数を並び替え、カテゴリースコアを表示している。最も高い偏相関係数の変数は、この結果でも「仕

表 2 高スマホ利用者と高パソコン利用者の特性比較

	高スマホ利用者	高パソコン利用者
仕事でパソコンを使い始めた年代	若い時から	若い時から
年齢	低い	—
性別	—	男性
即時遅延	即時傾向	—
経済的ゆとり	—	ある

仕事でパソコンを使い始めた年代」であり、早い時期からパソコンをパソコンで利用した場合、パソコンの利用も高い傾向であった。次に高い変数は「性別」であり、シニアの中でも男性がパソコンの利用が高い。その次が「経済的ゆとり」であり、ゆとりがあるほど、利用が高い傾向である。

なお、両分析とも「居住地域」「都市規模」では偏相関係数が低い。スマホの所有率を見ても、特に60代においては、地域差が少なく、利用時間においても大きな差がなかったことが推察される[1]。

5. 考察

スマホ利用、パソコン利用それぞれの分析結果から、利用の多いシニアの特性をまとめたのが表2である。共通しているのが「仕事でパソコンを使い始めた年代」が若い時期である。偏相関係数も他の変数と比較し最も高かった。パソコンの利用の多寡と現役時代のパソコン利用の関連が強いのは予見できたが、現在のスマホの利用にも最も強く関連していた。ここから推察されるのは、ICTの利活用がどれだけ早い段階から行われていたかが、現在のスマホを含むICT利用全体の利活用にも影響をもたらしているのではないか。さらにこの世代のインターネット利用は男性の方が長い[7]。その差は、当時の就業率の差（仕事でパソコンを利用している人の男女差）と、本稿の分析結果が関連していることが推測できる。このようにシニア層のインターネット利用は「ライフコース」と関係していることが示唆された。

6. 参考文献

- [1] <https://www.moba-ken.jp/project/seniors/seniors20230406.html> (2023. 5. 22 確認)
- [2] 桂瑠以・橋本和幸(2019) 高齢者のインターネット使用が社会的活動及び精神的健康に及ぼす影響の検討『情報メディア研究 第18巻 第1号』, 1-12
- [3] 太田康博・斉藤雅茂・中込敦士・近藤克則(2022) 高齢者のインターネット利用と健康・幸福感の関連『老年社会科学 第38巻第3号』, 337-344
- [4] 福定正城・斉藤雅茂・近藤克則・斎藤民(2022) 対面・非対面交流のタイプ別にみた高齢者の主観的健康：JAGES2019横断研究『厚生指標2022. 10』, 1-9
- [5] 水野一成・近藤勢津子・吉良文夫(2022) ICTサービスの利用によって生じた「情報格差」が及ぼした「生活の変化」について：年代間、シニア間の差を定量調査で分析『第17回日本応用老年学会大会』
- [5] <https://www.moba-ken.jp/whitepaper/wp22/img/wp22-8-01.png> (2023. 5. 22確認)
- [6] 飽戸弘(1987)『社会調査ハンドブック』日本経済新聞社, 300-302
- [7] <https://www.moba-ken.jp/project/seniors/seniors20230615.html> (2023. 6. 15予定)